

東光原

熊本大学附属図書館報

Kumamoto University Library Bulletin, No.35, Jan. 2003

- 図書館サービスの品質調査について
- ラフカディオ・ハーンと正岡子規・夏目漱石の接点
- 永青文庫の中の「明治維新」
平成14年度（第19回）貴重資料展を終えて



熊本大学附属図書館蔵
『沖縄風俗絵巻』（部分）

図書館サービスの品質調査について

加藤 信哉

附属図書館では平成13年度から図書館サービスの現状の把握と改善のために「図書館サービスの品質調査」を筑波大学図書館情報学系（平成14年9月までは図書館情報大学図書館情報学部）の永田治樹教授と共同で行っています。平成13年度は、教官、大学院生、学部学生を対象としたアンケート調査を11月に行い（調査実施の報告は「東光原」平成14年1月号を参照）、平成14年度は教官、大学院生、学部学生について12月にフォーカス・グループ・インタビューを行いました。また、平成14年度には平成13年度に行ったアンケート調査のフォローアップのための小規模な調査の実施も予定されています。

「図書館サービスの品質調査」は新しいタイプの図書館評価の手法で、これまでの図書館利用統計やアンケート調査では分からなかった図書館サービスに対する利用者の期待や満足の程度が明確になりつつあります。調査が終了していませんので図書館側

の中間報告として、以下にアンケート調査とフォーカス・グループ・インタビュー概要を簡潔にご紹介します。

1 「図書館サービスの品質調査」

「図書館サービスの品質調査」はSERVQUAL（「サーブカル」と発音します）という方法に基づいています。この方法ではサービスの品質を顧客がサービスに対して持っている期待と実際のサービスとの差（ギャップ）としてとらえています。サービス品質のギャップモデルを図1に示します。

SERVQUALでは顧客の判断基準となる五つのサービス局面（有形性：設備などの目に見えるもの、信頼性：確実なサービス、応答性：反応の良さ・迅速性、保証性：丁寧さ・安全性、共感性：顧客理解・コミュニケーション）に対応した質問を用意し、顧客の期待度と実際のサービスの認知度を7段階（1：非常に悪い、2：悪い、

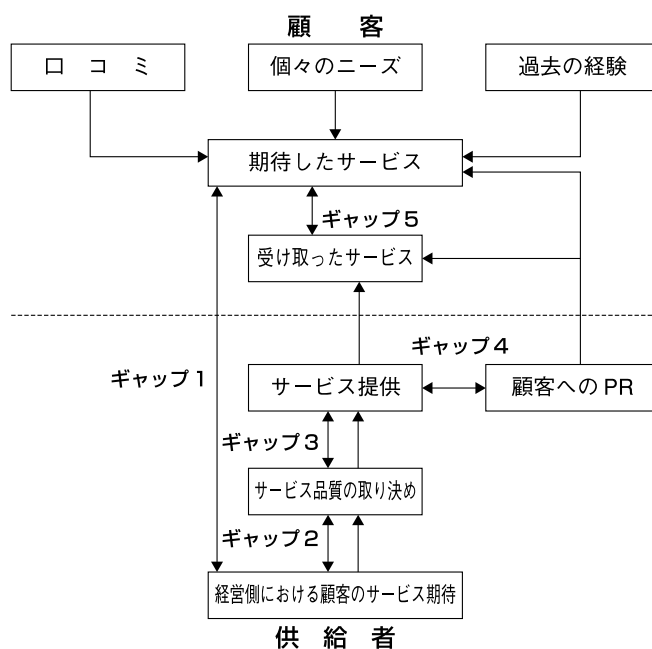


図1 サービス品質のギャップモデル

3：やや悪い、4：普通・並み、5：やや良い、6：かなり良い、7：非常に良い) で評価してもらい、そのポイントの差で品質評価をします。

2 アンケート調査

平成13年に行われたアンケート調査では図1に示した「ギャップ5 (期待したサービスと受け取ったサービスの差)」を対象としました。アンケートは全教官979名とサービス対象の図書館ごとに無作為抽出した学生1,214人に送付しました。回答率は、学生が34.3%、教官は44.8%でした。

この調査ではSERVQUALの五つのサービス局面に二つの局面 (場所としての図書館、コレクション&アクセス) を加えた七つの局面について29項目の質問を用意しました。質問項目は表1のとおりです。

質問項目に対して「最低限ここまでは」という期待値 (最低限)、「できればここまでは」という期待値 (最大)、そして「実際に受け取ったサービス」という認知の値を尋ねています。その結果を利用者の階層ごとに最低限の期待値と認知のギャップの順に並べてみたのが表2です。

表2から学生は図書館サービスに対する最低限の期待値が低いこと、その低い期待値を実際のサービスが満たしていないこと、最大の期待値はそれなりにあることがわかります。一方、教官の図書館サービスに対する最低限の期待値は学生よりも高いが、満たされていないこと、最大の期待値は学生とそれほど変わらないこと、がわかります。最低限の期待値、最大の期待値、認知の全てにわたって学生よりも教官のポイントが高くなっています。

個別の項目について見ると学生、教官とも「図書館には学習・研究のための静かな空間が用意されている」、「資料を見出すことが容易である」、「必要な資料のほと

表1 質問項目

有形性	建物・設備が魅力的である
	最新の機器を備えている
	サービス案内 (パンフレット、建物内外の案内表示が) がわかりやすい
信頼性	利用者の要求に適合したサービスを行う
	頼んだサービスはきちんと実行される
	約束した時間までにサービスを行う
	利用者が抱えている問題に真摯に対応する
応答性	迅速なサービス
	サービス時間 (受付, 所要, 終了) は周知されている
	職員は進んで利用者を援助する
	職員は常時利用者に対応する態勢をとっている
保証性	職員は利用者の信頼を得ている
	職員はいつも丁寧に配慮してくれ、親切である
	職員は質問に対応できる知識を持っている
	プライバシーは保護されており、安心できる
共感性	開館時間の設定が適当である
	職員は利用者のニーズを理解する
	職員は利用者に対し親身に対応する
	利用者ごとに個別の対応をする
	利用者の利益を第一に考える
場所としての図書館	図書館では、思考にふけったり構想を練ることができる
	図書館は快適で足を向けたくなくなる場である
	図書館には学習・研究のための静かな空間が用意されている
コレクション & アクセス	必要な資料のほとんどは図書館で入手できる
	リクエストすれば資料を入手してくれる
	資料を見つけ出すことが容易である
	図書館に足を運ばなくとも、ネットワークを通してサービスを受けられる
	必要に応じて、利用指導や講習会が受けられる 思わぬ情報やアイデアが期待できる

んどは図書館で入手できる」の期待値が高いにもかかわらず認知とのギャップが大きくなっています。また、「建物・設備が魅力的である」という項目は最低限の期待値が比較的低いのにに対して認知とのギャップが大きくなっています。現状の制約を認めつつも不満の大きな項目といえましょう。図書館職員の対応についてはある程度満足していることがうかがえます。学生は、「図書館に足を運ばなくとも、ネットワークを通してサービスを受けられる」という項目にかなり期待がありますが、実際の

サービスは十分とはいえないようです。

中央館について質問項目を最低限の期待値と認知のギャップの順に並べてみたのが表3です。

表3からは利用者が中央館に対して「図書館には学習・研究のための静かな空間が用意されている」、「資料を見出すことが容易である」、「必要な資料のほとんどは図書館で入手できる」という項目に不満をもっていることがわかります。また、「建物・設備が魅力的である」という項目に対する不満も大きいようです。昭和48年に新営されて以来30年近く全く増改築されていない中央館の問題が浮き彫りにされているように思います。

3 フォーカス・グループ・インタビュー

平成14年に行われたフォーカス・グループ・インタビューは、平成13年に行われたアンケート調査のサービス局面の重要性を確認するために行われたものです。

フォーカス・グループ・インタビューでは、学生、大学院生、教官の三つのグループ（それぞれ6～7名で構成）ごとに永田教授と共同研究者である佐藤義則山形県立女子短期大学助教授の司会で70分程度、図書館サービスについて自由に意見を述べていただきました。

学生とのインタビューでは、学生に図書館が行っているサービスにどんなものがあり、どのレベルまでサービスしているかが必ずしも理解されていないことがわかりました。2のアンケート調査結果で示された学生の図書館サービスに対する最低限の期待値が低い理由はどうかこの辺りにあると考えてよいようです。図書館利用についてのガイダンスや広報についての一層の工

夫が必要だと感じました。また、4年生の学部学生と大学院生は授業がない時間は、図書館ではなく、研究室又は学部の図書室を利用していることもわかりました。要望としては、図書館サービス全般についての広報、休日の開館時間の延長、パソコンの増設、くつろげる場所の整備などがありました。特に大学院生からは個々のデータベースの使い方についての詳しいガイダンスの要望がありました。

教官とのインタビューでは、個別のサービスについての改善要求ではなく、教育の観点から図書館のコレクションやアクセス、スタッフの対応、サービスの場としての図書館、サービスのあり方・組織に対して評価や要望を行っていることがわかりました。コレクションの集中管理と分散管理については意見が分かれていましたが、教育・研究の形態、建物の増改築、資料・サービスの電子化などとの関連でサービス方針を慎重に検討する必要があると感じています。

今までにご紹介したように「図書館サービスの品質調査」は図書館のサービスの現状把握と今後の改善に様々な示唆を与えるものです。図書館としてもこの調査結果を活かしながらより適切なサービス計画を立案したいと考えています。

記事をまとめるにあたり、調査結果その他の資料のご提供とご指導をいただいた永田教授と佐藤助教授に感謝いたします。また、お忙しい時期にアンケート調査やフォーカス・グループ・インタビューに快くご協力いただいた教官、学生の皆様に心からお礼申し上げます。

(かとう しんや 情報サービス課長)

表2-1 学生 (学部学生と大学院生)

質問事項	期待値 (最低限)	期待値 (最大)	最低限の期待と 認知のギャップ
・必要に応じて、利用指導や講習会が受けられる	3.68	4.93	0.55
・利用者ごとに個別の対応をする	3.81	5.00	0.41
・職員はいつも丁寧に对应してくれ、親切である	4.43	5.71	0.24
・利用者の要求に適したサービスを行う	4.33	5.68	0.21
・サービス時間(受付, 所要, 終了)は周知される	4.26	5.40	0.21
~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~
・図書館に足を運ばなくとも、ネットワークを通してサービスを受けられる	3.90	5.31	-0.10
・建物・設備が魅力的である	3.69	5.24	-0.17
・図書館には学習・研究のための静かな空間が用意されている	4.70	6.12	-0.30
・必要な資料のほとんどは図書館で入手できる	4.28	6.00	-0.37
・資料を見つけ出すことが容易である	4.35	5.83	-0.44
平 均 値	3.99	5.45	-0.13

表2-2 教官

質問事項	期待値 (最低限)	期待値 (最大)	最低限の期待と 認知のギャップ
・職員は利用者に親身に対応する	4.35	5.49	0.39
・利用者ごとに個別の対応をする	4.19	5.25	0.37
・職員はいつも丁寧に对应してくれ、親切である	4.55	5.64	0.34
・利用者が抱えている問題に真摯に対応する	4.33	5.51	0.31
・頼んだサービスはきちんと実行される	4.97	5.96	0.28
~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~
・図書館では、思考にふけったり、構想を練ることができる	3.96	5.18	-0.31
・資料を見出すことが容易である	4.47	5.77	-0.42
・図書館には学習・研究のための静かな空間が用意されている	4.50	5.69	-0.44
・建物・設備が魅力的である	3.66	5.02	-0.51
・必要な資料のほとんどは図書館で入手できる	4.18	5.67	-0.56
平 均 値	4.37	5.59	-0.13

表3 中央館

質問事項	期待値 (最低限)	期待値 (最大)	最低限の期待と 認知のギャップ
・必要に応じて、利用指導や講習会が受けられる	4.09	5.28	0.57
・利用者ごとに個別の対応をする	3.90	5.05	0.53
・職員はいつも丁寧に对应してくれ、親切である	4.49	5.67	0.27
・頼んだサービスはきちんと実行される	4.73	5.89	0.25
・利用者の要求に適したサービスを行う	4.31	5.63	0.23
~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~
・図書館では、思考にふけったり、構想を練ることができる	4.18	5.61	-0.11
・建物・設備が魅力的である	3.63	5.14	-0.15
・図書館には学習・研究のための静かな空間が用意されている	4.56	5.91	-0.18
・資料を見出すことが容易である	4.41	5.82	-0.42
・必要な資料のほとんどは図書館で入手できる	4.19	5.80	-0.46
平 均 値	4.21	5.59	-0.01

## ラフカディオ・ハーンと正岡子規・夏目漱石の接点

西川盛雄

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は卑近な日常生活の諸相を民俗学的な視点をもって日本を解釈し、これを英語で広く欧米に紹介・解説していった。例えば道端の盆踊りや子供の情景や小さな昆虫や昔から伝えられて来ている民話や俚諺などに深い興味を示している。特にハーンが日本の短詩型文学に深い関心を寄せていたことは特筆しておいてよい。『霊の日本』のなかの「小さな詩」のなかでは、「日本の国では詩歌は空気のように偏在している。国民の誰もが詩歌に心を寄せている。」（平井呈一訳）と解説している。ここでいう小さな詩とは日本古来の五・七のリズムをもった短歌・俳句のことである。さらに「これを選別してみれば、あるいは日本人のある感情の特質を解明する役に立ちはしないだろうか」（同上）と言い、日本の短詩型文学の考察を通して日本人の心の深層に迫っていくことができるのではないか、ということを示唆している。

明治二十年年代の後半、短歌と俳句を「写生」という言葉で括って日本の定型文学の近代化を目指したのは正岡子規であった。その子規は伊予松山の人であり、学友に日露戦争のときの海軍中将秋山真之がおり、同時に旧制一高以来の親友夏目漱石がいた。後に熊本にあって漱石は自らの作品と寺田寅彦の作品を松山に送って子規に俳句の添削を受けたりしている。子規が日清戦争の従軍記者として中国に渡って帰還の途

中咯血し、しばらく神戸で療養していたが、やがて帰郷、明治二十八年八月、漱石の松山での仮寓（「愚陀佛庵」）の階下にくろがり込み、以後二人の共同生活が五十日余り続くのである。その間この庵で行われた松山松風会の句会のことはよく知られている。高濱虚子や内藤鳴雪、河東碧梧桐らが集い、日本の新興俳句の新しい息吹がこの頃、この地に芽吹いていたのである。言うまでもなく夏目漱石もこの中にいた。

漱石は慶応3年（1867年）に現在の新宿区喜久井町で名主の五男として生れ、生後すぐ里子に出されたりするが、すでに江戸時代からの漢詩や南画の世界に触れて育っていた。十五才で二松学舎に通って漢文の世界に親しんでいたが、翌年大学予備門受験のため成立学舎で英語を学び始める。子規とは明治二十二年、旧制第一高等中学で同級になり双方とも好きな寄席の話で親しくなっていた。明治二十八年四月、漱石は愛媛尋常中学（松山中学）の英語教師として赴任し、一年後には熊本・第五高等学校に異動。ここで中根鏡子と結婚し、長女筆子が誕生する。熊本で4年3ヶ月滞在した後、ロンドン大学に官費留学したが彼の地で「下宿籠城主義」を貫いて文学論の構築を夢見て読書に心血を注ぐが、そのさ中、明治35年（1902年）の秋に漱石は子規の訃報をロンドンで聞くのである。この時子規の死を悼んで虚子に送った手紙には次のような句が添えられていた。

筒袖や秋の柩にしたがはず

(明治三十五年)

手向くべき線香もなくて暮の秋

(同上)

「筒袖」とは洋服のことである。これは「倫敦にて子規の訃を聞いて」と前書きして五句作っているうちの二句である。明治35年帰国直前の12月1日、ロンドンからの虚子宛の手紙に記されたものである。

この漱石は旧制の第五高等学校においても東京帝国大学においても恒にハーンの後赴任するというめぐり合わせをもっていた。そして漱石は作家としても教育者としても著名なこの16歳年上のハーンをいたく気にしていたのである。

漱石作品には『夢十夜』という作品がある。その<第三夜>は「こんな夢を見た。」という出だしで始まる怪談話である。話是这样である。闇の夜、ある貧しい父親が六つになる子供を負って田圃の中を歩いている。その子は何時の間にか眼が潰れ青坊主になっている。何時の間にか背中で発する子供の言葉はまるで大人の声で、しかも対等である。父親が気持ち悪くなって子を打遣りたいと思いつつ森に差し掛かったとき、後ろで「ふふん」という声がするのである。やがて杉の根っ子のところに差し掛かったとき、「丁度こんな晩だったな」とつぶやき、「お父さん、その杉の根っ子の処だったね」と言うのである。そして「御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」と言ったとたん、背中の子が急に

石地蔵のように重くなる、という譚である。

実はこの漱石作品の原型は、出雲の持田浦という村のある百姓についての民話である。貧しさゆえ生れた子を六人まで川へ流したが、やや生活が出来るようになって七番目の男の子を育てる決心をして、生後五ヶ月になったその子を腕に抱いて夜の庭に出たところ、「御父つあん、わしを仕舞に捨てさした時も、丁度今夜のような月夜だったね」と言った後、一瞬また元の幼児にかえるのである。その後この百姓は僧になった、という譚である。

この二つの話はよく似ている。平川祐弘氏も指摘しているように、漱石はハーンを意識して自らもハーン作品に迫ろうとしてこのような再話による怪談を創ったと考えられる。ここにハーンと漱石の接点がある。加えて同じ小さな鳥の命のすさまじさとあわれさを扱ったハーン作品「草ひばり」と後の漱石作品「文鳥」もどこか似ている点興味深い。

ハーン作品中に子規に繋がって松山に関係する作品はないものだろうかと思っていれば例の『怪談』の中にあつた。「十六ざくら」がそれである。この「十六ざくら」にちなむ作品を子規は確かに残しているのである。

松山には「十六ざくら」がある。和田茂樹氏によると、<十六日桜は節会桜などといわれたが名月上人以後、孝子桜として著名、山越の龍穩寺境内にある>とのことである。生れ故郷の松山の句を子規は多く残したが、そのひとつにこの「十六ざくら」

の句がある。

孝行は筈よりも桜かな

(明治二十五年)

さてこの十六日桜は伊予の国和气郡にある桜の木である。桜の花の咲くのは春四月と相場は決まっているが、この桜だけは冬のさ中、陰暦の正月十六日に花を咲かせる。その謂れにはこの桜に花を咲かせるものは人間の切なる魂の力であることを証しているのである。

話はこうである。ある伊予の国の侍が、屋敷にあった桜をととても大切にしていた。しかし幼児からこの木の下で育ち、両親、係累も皆大切に世話をし、思い出のいっばいつまったこの桜の木が枯れたのである。すでに老年になっていたこの侍はこの木をいたく悲しみ、自らの命に替えてこの桜の木に花を咲かせようとしたのである。やがて木の命の身代わりに立つことを決意したこの老人は型通りの作法を守って自刃し、自らの魂魄を桜の木に乗り移らせたのである。その日が丁度正月十六日だったのである。それ以後雪の降るこの時節の十六日に決まってこの桜には命の証のように花が咲く、というのである。

さて十六日桜を訪ねて子規は今ひとつ句に残すのである。

うそのやうな十六日桜咲きにけり

(明治二十九年)

ハーンは多く説話や民話を再話文学とし

て自らの創作のスタイルとしていた。そこには超自然的な霊の世界、あるいは幻視の世界が展開されており、またそこには素朴な庶民のモラルも含意されている。ハーンの『中国怪談集他』『怪談』『骨董』『天の川綺譚』『霊の日本』『明暗』『日本雑記』等に出てくる多くのハーン作品はこの再話文学であったことは心に留めておいてよい。

(にしかわ もりお 教育学部教授)



小泉八雲肖像画



## 永青文庫の中の「明治維新」 平成14年度（第19回）貴重資料展を終えて

三 澤 純

今年度の貴重資料展を終えた今、痛切に感じていることは、永青文庫細川家文書の「広さ」と「奥深さ」である。4月から始めた準備作業は、永青文庫という「巨大迷路」の中での悪戦苦闘の連続であったし、結果的にそこからなんとか抜け出せはしたが、その抜け出し方は、壁を乗り越えたり、壊したりという強引なものであったからである。この準備作業を振り返りながら、本資料展の反省点と成果とについて整理してみたい。

今年度の資料展を企画するに当たって、私は二つの指針を持っていた。一つ目は題材を明治維新时期に求めたいということ、二つ目は絵図等のビジュアルな資料をできるだけ多く展示したいということである。一つ目の指針は、日本近現代史を専攻する私と、図書館架蔵の重要資料群（日本中世史・近世史に関わる古文書・古記録が中心）との間の接点は多くはなく、自ずと近世史の「終末」であると同時に、近代史の「出発点」に当たる明治維新时期が浮上することになったためである。幸い、過去18回の資料展は全て中世史・近世史から題材を選んでおり、こうすることで今年度の、そして私のオリジナリティーを発揮することができるかと予想された。二つ目の指針は、かつて何度も資料展の企画を担当された先生からの、この資料展が学外に一般公開されることを踏まえたアドバイスに基づくものである。

しかしこの二つの指針がなかなか折り合わなかったことが、もともと複雑な「迷路」



をさらに複雑にすることになった。すなわち、「幕末維新时期政治史の流れを永青文庫でたどる」というストーリーと、「絵図類を並べてみてそこから紡ぎ出される」ストーリーとが、私の頭の中でなかなか一致してくれなかったのである。この両者は夏休みが終わるまで対立し続け、当初は前者を基調としてPR文を書きながら（図書館HPに掲載）、結局、後者に則った方針によって資料は選択され、展示されることになってしまった。こうした事態に立ち至るであろうことはある程度予測できたので、タイトルの「明治維新」にはわざわざカギ括弧を付してもらい、どちらに転んでもいいようにしておいたのだが、いかにもぶざまな「迷走」であった。

裏事情を明かせば、このように不格好な資料展ではあったが、いくつかの収穫もあった。その一つは、永青文庫の中に近世後期の海外情報に関する資料が豊富に存在することが確かめられたことである。これにより、「これらの情報は果たして藩政運営に活かされたのか」「細川家が入手した情

報と、入手できなかった情報との背景にはどのようなメカニズムが存在したのか」等という新たな課題が設定されることになった。とりわけ『亜墨利加狂歌集』(上下2巻)という、ペリー来航後に江戸庶民の間で流行した出版物が2セットも存在していたことは興味深かった。私は講演の中でその理由を、「ペリー来航時の細川家のすばやい対応に江戸の民衆は賞賛を与えており、そのことに藩側が気をよくした結果だろう」と述べておいた。いずれにしてもこの資料展のおかげで、「細川の水で入れたる上きせん 四はいくらはたつた一トのみ」「隈本の九曜の星のさき備 八陣よりもかたい手配」等という狂歌を読みながら、大名家がこうした庶民の評判に耳を傾け始めた(傾けざるを得なくなった)当時の社会



状況に思いを馳せるといふ、この上もなく楽しい時間を過ごさせてもらうことができたのである。

(みさわ じゅん 文学部助教授)

## 最近の図書館の動き (平成14年10月～12月)

### ●電子ジャーナル・データベース利用説明会を実施

附属図書館では、3,000タイトル以上ある電子ジャーナルの円滑な利用を目的とした説明会を開催しました。初めて電子ジャーナルを使う教職員、大学院生、学部学生を対象にした、「電子ジャーナル利用説明会(入門編)」を平成14年10月1日(火)から7日(月)まで、中央館、医学部、薬学部で計8回行い、100名の受講者がありました。引き続き、平成14年10月15日(火)には、エルゼビア・サイエンス社の電子ジャーナルサービス、「Science Direct」の利用説明会を大教センター、医学部で計2回行い、22名の参加者がありました。

また、平成14年10月29日(火)には、引用索引データベース「Web of Knowledge」の利用説明会を大教センター、医学部、薬学部で計3回行い、70名の参加者がありました。

### ●図書館ガイダンス(中級編)を実施

附属図書館では、中央館にて、平成14年12月2日(月)から12月19日(木)まで、図書館ガイダンス(中級編)を開催しました。

このガイダンスは、文献の基本的な探索方法を学ぶことを目的としています。雑誌コース、新聞コース、所蔵コースの3つのコースが用意されており、それぞれ、雑誌論文の探し方、新聞記事の

探し方、所蔵の調べ方についての説明とパソコンを使った演習、館内ツアーが主な内容となっています。期間中、計16回の開催で、全部で145名の受講者がありました。

### ●貴重資料展・公開講演会

附属図書館では、11月2日(土)から4日(月)の三日間、熊粹祭にあわせて「永青文庫の中の『明治維新』」をテーマに「平成14年度(第19回)熊本大学附属図書館貴重資料展」を開催いたしました。

展示資料は、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが浦賀に上陸した日本の歴史上一大画期となった1853年7月8日の様子を描いた浦賀之図、黒船図、蒸気船之図、また明治三年(1870)当時の運送会社の広告チラシ(蒸気船時刻表)など、これまで公開されなかった幕末明治初期の絵図、古文書41点が展示され多くの一般市民など360名の見学者があった。また、11月2日(土)には、文学部助教授三澤純先生による「永青文庫の中の『明治維新』」と題した公開講演会を図書館大会議室で開催し70名を超える参加者がありました。

## 本学教官寄贈図書（平成14年10月～12月）

★ASPECT熊大コーナーに配架しています★

◆高橋隆雄（教育学部）

ヒトの生命と人間の尊厳 / 高橋隆雄編. --

福岡：九州大学出版会，2002.9

熊本大学生命倫理研究会論集

中央館・教官著書コーナー：490.15/H,77

## 委員会報告（平成14年10月～12月）

### 図書館運営委員会

■平成14年度第5回（12月4日）

[協議事項]

- (1) 附属図書館長選考日程について
- (2) 平成16年度附属図書館概算要求について
- (3) 平成14年度重点配分経費の要求及び執行計画(案)について
- (4) 医療技術短期大学部図書室の運営について
- (5) 熊本大学学術情報基盤整備について

[報告事項]

- (1) 熊本大学附属図書館寄贈図書受入要項について
- (2) 貸出図書返却状況検討WG報告
- (3) 附属図書館貴重資料展・公開講演会の実施報告について
- (4) その他
  - 1) 図書館業務用電子計算機のリプレースについて
  - 2) 医学部分館、薬学部分館の24時間対応入館システムの更新について

### 医学部分館図書委員会

■平成14年度第2回（12月17日）

[協議事項]

- (1) 熊本大学情報基盤整備—全学コアジャーナルの設定—
- (2) 平成14年度学生図書費（重点配分）について
- (3) 長期図書返却延滞者について
- (4) 奥窪基金について

## 日誌（平成14年10月～12月）

10.1-3,10.7	電子ジャーナル利用説明会-入門編-（中央館、医学部、薬学部）	11.19-20	平成14年度九州地区国立大学図書館長、事務（部・課）合同会議
10.11	メタデータ・データベース共同構築事業説明会（九州大学）	12.2-19	図書館ガイダンス「中級編」開催（中央館）
10.15	Science Direct利用説明会（中央館、医学部分館）	12.4	平成14年度第5回附属図書館運営委員会
10.23	電子ジャーナル利用支援WG（九州大学）	12.4	フォーカス・グループ・インタビュー（中央館）
10.28-11.1	九州地区国立学校等会計事務研修（福岡県立社会教育総合センター）	12.5-6	第15回国立大学図書館協議会シンポジウム（九州大学）
10.29	Web of Knowledge機能説明会（中央館、医学部、薬学部）	12.12	第40回日本薬学図書館協議会九州地区会議（薬学部分館）
11.2-4	平成14年度附属図書館貴重資料展並びに公開講演会	12.17	平成14年度第2回医学部分館図書委員会
11.11-13	平成14年度目録システム地域講習会-図書コース-（琉球大学）	12.27	図書館ホームページのリニューアル
11.14-15	平成14年度九州地区国立大学図書館協議会実務者連絡会議（大分大学）	12.27-1.6	年末年始休館：中央館
		12.28-1.5	年末年始休館：医学部分館・薬学部分館

# 図書館ホームページが新しくなりました。

平成14年12月27日から、図書館ホームページのトップページが新しくなりました。図書館から提供する情報やサービスを、厳選・整理し、わかりやすくご覧いただけるようにしています。

今後とも図書館ホームページによるサービスをよろしくお願ひします。



編集後記：附属図書館では、まだ公開していない絵巻物もあり、その内の一点を紹介したいと思います。(表紙絵巻図) 本学図書館所蔵で、沖縄関連資料の中では非常に珍しい沖縄風俗を描いた巻物があります。資料名は「沖縄風俗絵巻」で、絵の仕上がりも色彩もすばらしく、見れば見るほど楽しく資料的価値は言うまでも有りません。紙本(卷子)、縦30cm、横20m17cm。作者・制作年代不明だが明治初年(1870年代)から半ばにかけてのものだろうと言われている。画面は表題をつけて52区画に分けられています。他に絵巻物にして紹介されたのは、ハワイ大学ホーレー文庫に所蔵されている仲宗根璋山の「沖縄風俗絵画」(1889年)が一般に知られている。図書館所蔵の「沖縄風俗絵巻物」は、一昨年ガイダンスの館内ツアー(貴重書庫)で一部公開しましたが、今度は全巻、長さ20m17cmを完全公開したと思います。(と)

## 熊本大学附属図書館報「東光原」(とうこうげん)* 第35号(2003.1)

平成15年(2003年)1月発行

発行所 熊本大学附属図書館  
〒860-8555 熊本市黒髪2-40-1  
TEL:096(342)2273 FAX096(342)2210  
<http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/tokogen/>  
編集 加藤信哉, 梅尾勝征, 安陪光恭,  
北野典子, 中尾康朗, 森下和博

※現在の中央館の敷地一帯が、旧制第五高等学校時代東光原と称する運動場であったことに由来する。